

当院におけるコミュニケーションツールの活用法

○養原 歩、劉 中憲、酒本 智映
(パンダ小児歯科医院)

【はじめに】近年、患者に対する口腔ケアの必要性は広く認知されている。しかしながら、特に低年齢の患児においては、「家庭内での歯磨きが出来ない。」「どう対応していいのかわからない。」という保護者が多く、適切な口腔ケアを行うには、現状を把握する必要があると考える。当医院において歯科診療の一環として、口腔内カメラを活用し、患者および保護者に明確に説明し、現状を認識して頂き、今後の口腔ケアの改善や継続的かつ改善となりうるように専門的口腔内管理を行った。

【口腔内管理の実際】当医院における患者および保護者に対する口腔ケアの説明方法は、口腔内カメラ(パナソニック社製デンタルアイ)システムを用いて視野を活用して説明を行う方法である。

【メリット】口腔内カメラを活用するに当たり、口腔ケアはもちろんのこと術前術後等の口腔内管理においていつでも迅速に誰でも簡単に画面による操作の活用により、口腔内管理がの質の向上および効率化が可能となった。患者および家族に対する利便性が向上し、患者の意識の改善につながり、口腔内の状態に合わせて、口腔内ケアの方法を共に考えることが大切であるとする。

【まとめ】1.口腔内健診の際に口腔内カメラを用いて撮影し、その映像を本人と保護者と一緒に確認してもらい、現状を十分に認識してもらうことができる。2. TBIの際に、プラークや歯石の付着状態、白濁やう蝕の部位を映し出し、その状態にあった TBI を行なうことができる。言葉だけでは伝わらない内容も、画像を見せることにより認識、理解いただき、今後の食生活の改善、ブラッシングに対する保護者の動機付けとなり、TBI をスムーズに行うことができる。3. リコール時に、歯周病治療前後の歯肉の状態、咬合誘導治療時の咬合状態の変化をモニタリングすることにより、治療に対する意識の向上に繋がる。

初診時カリオスタット値と齲蝕再発との関連

○松元一生、高裕子、若松美咲、西田茉央、
中島麻莉菜、宮川尚之
((医) まほうつ会みやかわ小児矯正歯科)

【目的】

長期にわたって継続的口腔管理を受けている小児において、初診時のカリオスタット値と5年間の管理期における新生齲蝕発生および齲蝕再発を比較した。

【対象と方法】

対象は初診時年齢が4歳から7歳で、初診時に齲蝕が認められ、治療を完了した後、継続して5年間以上の口腔管理を受けた小児を対象とした。

初診時に測定しているカリオスタット値を-、+、++以上の3群に分け、各群における齲蝕再発および新生齲蝕の発生について、5年間の推移を経年的に比較した。

【結果】

初診時カリオスタット値が1、2の患者は2年後、3年後に再発しているケースが多く、同時に経年毎の再発に関して3群間に明らかな有意差が認められた。

新生齲蝕に関しては1の患者は3年後、2では1・2年後に多く見られたが、3群間に明らかな有意差は認められなかった。

【考察】

今回の結果から初診時カリオスタット値が大きいほど齲蝕は再発する傾向が示された。今回の対象者は初診時に齲蝕を持つため、その現症を反映したものである可能性がある。新生齲蝕に対して相関が認められなかった理由の一つとして混合歯列期におけるシーラント介入が考えられる。

【文献】

1) 齲蝕活動性試験結果と齲蝕現症間の関連性 (第2報)

細矢由美子 他 小児歯科学雑誌, 39(3): 568-578, 2001.

2) 1歳6か月時と3歳時の齲蝕活動性と6歳時の齲蝕罹患状態について

岡崎好秀 他 小児歯科学雑誌, 38(3): 622-628, 2000.